

国際比較調査におけるレスポンス・スケールの等価性に関する研究(2)*

真 鍋 一 史**

1. はじめに

前稿では、①国際比較調査における測定の等価性をめぐるさまざまな問題のなかで、とくに質問紙(調査票)のレスポンス・スケールに焦点を合わせて研究を進めることの意義を示し、②そのようなレスポンス・スケールに関する先行研究の成果の整理を行ない、③このような研究領域における新しい試みの一つとしてMINTS (Research into the Methodology of Intercultural Surveys) プロジェクトが注目されることを指摘した。

MINTS プロジェクトは、ドイツ・マンハイムの「サーベイ・リサーチの方法と分析のための研究センター (Zentrum für Umfragen, Methoden und Analysen : ZUMA)」と米国シカゴ大学の「全国世論調査センター (National Opinion Research Center : NORC)」の共同研究として進められている「レスポンス・スケールの翻訳の可能性と問題性の探求のための実験的な試み」である。

ここでは、まず、MINTS プロジェクトの実験的なパイロット・スタディのやや詳細な紹介から始める。そのために利用した文献は、Peter Ph. Mohler, Tom W. Smith and Janet A. Harkness, Respondents' Rating of Expressions from Response Scales : A two-country, two-language investigation on equivalence and translation, In : *NACHRICHTEN*, Spezial, No. 3, ZUMA, 1998である。

2. 実験的なパイロット・スタディ

2.1 方法

レスポンス・スケールの「表現 (expressions :

翻訳の仕方も含めて)」の交差国家的な等価性を検討することを目的として、実験的なパイロット・スタディ(質問紙を用いた個別面接調査)がアメリカ合衆国とドイツにおいて実施された。それぞれの国での具体的な調査方法は、以下のとおりである。

<アメリカ合衆国>

- ・調査対象者：一般成人男女
- ・サンプリング：①アメリカ合衆国の4つのセンサス地域(西部、南部、中西部、北東部)を代表するサンプル地点を抽出する。②性、年齢、雇用形態などの「層化変数 (stratification variables)」で構成される「割当表 (quota table)」にもとづいてサンプル地点の各世帯 (households) から個人サンプルを抽出する。
- ・サンプル構成：性、年齢、雇用形態ばかりでなく、結婚形態、人種についてもサンプルは母集団を統計的に代表するものとなった。
- ・調査の企画・実施：NORC
- ・実査時期：1995年7月～8月
- ・有効回答：117ケース

<ドイツ>

- ・調査対象者：一般成人男女
- ・サンプリング：①ドイツの各地域を代表するサンプル地点を抽出する。②これらの地点から性、年齢、学歴で構成される「割当表 (quota table)」にもとづいてサンプルを抽出する。
- ・サンプル構成：サンプルはドイツ連邦の14州と2特別市(ベルリン・ハンブルク)の二つの主要なサブ・ストラタ (substrata) ——人口10万人以上の大都市地域と小さな町——の

*キーワード：国際比較調査、レスポンス・スケール、等価性

**関西学院大学社会学部教授

すべてをカバーするものとなった。

- ・調査の企画：ZUMA
- 調査の実施：Infratest-Burke Sozialforschung
- ・有効回答：221ケース

2.2 調査票

アメリカ合衆国においても、ドイツにおいても、それぞれ二種類の異なる調査票が用意された。それを、ここではスプリット (splits) と呼ぶことにする。

<アメリカ合衆国>

アメリカ合衆国の二種類の調査票の相違点は Q. 4にある。つまり、調査票 A の Q. 4 では important/unimportant という表現が使われているのに対して、調査票 B の Q. 4 では important/not important という表現が用いられているということである。

<ドイツ>

ドイツでは「アグリーメント・スケール (agree/disagree というレスポンス・スケール)」を用いたすべての項目で、二種類の調査票の表現が異なる。つまり、調査票 A では disagree は ablehnen というドイツ語に翻訳された。ablehnen は disagree あるいは reject という意味をもつ動詞である。一方調査票 B では disagree は agree に not をつけた形で、nicht (not) zustimmen (agree) と翻訳された。

2.3 実験に利用された知識

パイロット・スタディでは、調査票の作成にさいして、英語の表現を基準として、それに対応するドイツ語の表現を模索・検討するという方法が採られた。これは、すでに、質問紙調査法 (questionnaire method) によって実施されている多数の国ぐにを対象とする最も大規模な国際比較調査 (large scale multi-national surveys) の一つである「国際社会調査プログラム (International Social Survey Programme : ISSP)」の経験と知識の蓄積があるからである。ISSP では、共通語としての英語で作成される Master Language Questionnaire が、それぞれの調査対象国に適合するようにそれぞれの言語に翻訳され、Target Language Questionnaire が作られる。

こうして、MINTS プロジェクトにおいても、ドイツ語への翻訳とワーディングの選択にあたっては、ISSP での経験以外に、以下のような知識の蓄積の活用がはかられた。

①現在、ドイツでなされているさまざまな調査において用いられている用語例。ただし、このような用語例を検討するならば、その多くはいわゆる「間に合わせ (その場しのぎ)」の翻訳であるか、さもなければ特定の調査機関あるいは国・地域の「好みのスタイル」を反映した翻訳であることが明らかとなる。

②翻訳の「適切さ (appropriateness)」についての翻訳者の判断。ここでは、質問紙作成のための「逆翻訳 (back-translation)」の作業が外部の翻訳機関に依頼されることが多く、そのためその判断をめぐる知識が調査主体によって必ずしも体系的に蓄積されていないという問題がある。

③レスポンス・スケールの対称性 (symmetry) を保つ質問文の形式をめぐる議論。たとえば、J. A. Harkness, P. Ph. Mohler and B. McCabe, Towards a Manual of European Background Variables, ZUMA Report on Background Variables in a Comparative Perspective, In : J.A. Harkness, P. Ph. Mohler and R. Thomas, *General Report on Study Programme for Quantitative Research (SPQR)*, Report to the European Commission, Mannheim : ZUMA (mimeo) などがある。

2.4 21点スケール上でのさまざまな表現の評定

実験的な調査における中心的な課題は、質問紙調査でしばしば用いられる①agreement/disagreement、②importance / unimportance、③for / against などのレスポンス・スケールのそれぞれのレベルを表現する選択肢——たとえば、「とてもそう思う」「ややそう思う」「まったくそう思わない」などの選択肢——を、0点から20点までの21点スケールの上で、回答者に評定してもらうというものである。このような課題は、普通の質問紙調査に答えるという課題とはかなり異なるものといわなければならない。

回答者はさまざまな表現を、その「強さの程度 (degree)」という点で評定する。したがって、た

たとえば *areement/disagreement* の例でいえば、回答者は理論的には “completely agree” という表現を20点の近くに評定し、“completely disagree” という表現を0点の近くに評定するものと考えられる。

ところで、回答者はいったんこのような評定の作業を終了した後で、自分の下した評定に目を通し、それらを全体的に調整 (adjust) あるいは訂正 (revise) する機会が与えられる。このステップは、心理的に有益であるとともに、情報提供的でもある。このステップを置くことで、評定の作業がより確実なものとなる。しかし、それによって回答者が「評定法 (ratings)」を「序列法 (rankings)」に切り替えるわけではない。

2. 5 「そう思う」という用語の意味

以上に述べた評定作業の後で、回答者はこの評定の対象になった用語——「そう思う」「そう思わない」「どちらともいえない」「重要である」「重要でない」などの用語——をどのような意味をもつものと理解しているかを示すように求められた。英語版での実際のワーディングはつぎのとおりである。

「さて、この調査で取りあげてきたいいくつかの用語についておたずねします。『そう思う (agree)』という用語はどのようなことを意味していると思われますか。その用語にはどのようなことが含まれていると思いますか。」

上にあげた「そう思う」以外の用語についても同じようなワーディングで質問がなされた。

表1A、Bは、それぞれ *agree*, *zustimmen* という用語を説明するのにアメリカ合衆国とドイツの回答者があげた言葉を列挙したものである。まずアメリカ合衆国の回答の結果については、61人の回答者が31の言葉をあげている。アメリカ人の回答の多くは、たとえば「agree とは agree である」というように、同じ言葉の繰り返しに終わっている。同じ言葉の語尾の変化、たとえば *agreement*, *agreeing* という言い替えのケースは13回で、まったく別の言葉での言い替えのケースは25回であった。

つぎに、ドイツの結果については、200人のドイツの回答者によってあげられた42の言葉のう

ち、90%は別の言葉で言い替えられたものであり、14の言葉が *zustimmen* という同じ言葉の繰り返しであった。

以上の結果に見られるドイツの回答者が別の言葉で言い替えようとする傾向と、アメリカ合衆国の回答者が同じ言葉をそのまま繰り返して使おうとする傾向は、さまざまな文化的に決定される諸要因 (various culturally determined factors) が反映された一つのケースといえるであろう (T. P. Johnson, D. O'Rourke, N. Chavez, S. Sudman, R. Warnecke, L. Lacey and J. Horm, *Social Cognition and Responses to Survey Questions among Culturally Diverse Populations*. In: L. Lyberg, P. Biemer, M. Collins, E. de Leeuw, C. Dippo, N. Schwarz and D. Trewim (eds.), *Survey Measurement and Process Quality*, New York: John Wiley and Sons, 1997)。

3. 回答者の評定の結果

3. 1 「中間 (in the middle)」という表現と「スケール外の選択肢 (off-scale options)」

英語版の調査票での *in the middle* と、ドイツ語版の調査票での *in der Mitte* は、いずれも0点から20点までの評定スケール (rating scale) のほぼ中間点 (the mid-point: 10点) のところに、その評定の平均値 (mean) がくることがわかった。

また、どちらの国の回答者も、英語の *neither/nor* という表現、そしてドイツ語の *weder/noch* という表現、さらに英語の *I can't choose* という表現、そしてドイツ語の *Kann ich nicht sagen* という表現など、これまでいわゆる「スケール外の選択肢 (off-scale options)」とされてきたものを、それぞれこの評定スケールの中間点の近くに位置づけることが明らかとなった。これまでのサーベイ・リサーチの方法論からするならば、一般に、「スケール外の選択肢」は意見のない回答としてリコード (recording the absence of opinions) されてきた。しかし MINTS プロジェクトの実験的な調査では、「中間の選択肢 (middle

表 1 A zustimmen (agree) という用語の意味についてのドイツの調査対象者の回答

Word	Frequency	Categ. Freq.
Akzeptieren	1	
Akzeptabel	1	
Akzeptiere	1	3
Anerkennen	1	
Befürworte	1	
Befürworten	2	
Befürwortung	1	4
Bejahe	1	
Bejahen	3	
Bejahung	4	8
Dafür	42	42
Einverstanden	47	
Einverstandnis	7	
Einverstandnis- erklarung	1	55
Gleiche	12	
Gleichen	2	
Gleicher	9	23
Groe	1	
Grund	1	
Grunde	3	
Gut	8	8

Word	Frequency	Categ. Freq.
Identisch	1	
Positiv	3	
Positive	4	7
Richtig	7	
Richtige	1	
Richtigkeit	1	9
Selbe	4	
Selben	1	
Selber	1	6
Soll	7	
Volle	3	
Volles	1	11
Zustimme	1	
Zustimmen	2	
Zustimmung	11	14
Zutreffend	1	
Zuverlassig	1	
bereinstimmen	1	
berzeugt	9	
bereinstimmung	6	
berzeugung	3	

表 1 B agree という用語の意味についてのアメリカ合衆国の調査対象者の回答

Word	Frequency	Categ. Freq.
About	2	
Accept	3	
Acceptance	2	6
Accomplish	1	
Accord	1	
Accordance	1	2
Admit	1	
Against	1	
Agree	8	
Agreeable	2	
Agreeing	1	
Agreement	2	13
Alike	1	
Approve	3	
Congenial	1	
Consensus	2	

Word	Frequency	Categ. Freq.
Consent	2	4
Disagree	1	
Favor	7	
For	5	
Harmony	2	
Like	2	
Liking	1	
Line	2	
Mutual	1	
Okay	2	
Same	16	
Similar	1	
Support	2	
True	2	
Valid	1	

表2 中間的な表現に対するアメリカ合衆国とドイツの回答者の評定の平均値

Item IDs D/USA	German Expressions	Mean D	Mean USA	American Expressions
A13/c	Stimme ein bißchen zu	12.46	12.10	Agree a little
A26/m	In der Mitte	10.02	10.10	In the middle
A22/z	Unentschieden	10.00	9.60	Undecided
A4/p	Stimme weder zu noch lehne ab	9.77	9.90	Neither agree nor disagree
A9/e	Kann ich nicht sagen	9.42	9.80	Can't choose
A7/u	Lehne teilweise ab	6.77	6.60	Somewhat disagree

options)」はスケールの中心付近 (close to the center of scale) に位置づけられたのであり、それが「スケール外の選択肢」であるよりも、まさに「中間の選択肢」であることが示唆されたのである (T. W. Smith, *Improving Cross-National Survey Research by Measuring the Intensity of Response Categories*, *GSS Cross-National Report*, No. 17, Chicago : National Opinion Research Center (mimeo))。

さて、表2は、このようなさまざまな中間的な表現に対するアメリカ合衆国とドイツの回答者のそれぞれの評定の平均値を示している。

3.2 「等価な翻訳 (equivalent translation)」と「等価な評定 (equivalent rating)」

表3は、英語とドイツ語のさまざまな表現に対する回答者の評定の平均値を示したものである。この結果から、少なくとも以下のような点が指摘されよう。

まず英語の In the middle と Agree a little、ドイツ語の In der Mitte と Stimme ein bißchen zu は、それぞれ評定の平均値がごく近いものであることがわかる。両者の評定の平均値の差は、アメリカ合衆国で2.00、ドイツで2.44となっている。

上の場合は0点から20点までのスケール上で In the middle / In der Mitte からポジティブな方向にある表現を取りあげたので、つぎにネガティブな方向で Agree a little, Stimme ein bißchen zu と言語的に対称的 (linguistic symmetry) であるところの Disagree a little, Lehne teilweise ab を取

りあげて、同じように In the middle / In der Mitte との評定の平均値の差を検討した。その結果、平均値の差はポジティブな方向よりもネガティブな方向でより大きいものであることがわかった。具体的にいえば、In the middle と Agree a little との差が2.00であったのに対して Disagree a little との差は3.00、In der Mitte と Stimme ein bischen zu との差が2.44であったのに対して Lehne teilweise ab との差は3.25となったのである。

さらに、In the middle と Disagree a little, In der Mitte と Lehne ein bischen ab との差は、順に3.00、3.05となり、それぞれのスケール上での距離はドイツ語に比べて英語のほうで相対的に大きいものであることが明らかとなった。

ここで問題は、Disagree a little と Lehne ein bißchen ab とは、いわゆる「言葉のシンメトリー性 (word symmetry)」という点では等価であるにもかかわらず、それぞれの国の回答者の評定という点においては等価となっていないということである。英語の Disagree a little をドイツ語で Lehne ein bißchen ab と翻訳することは、「構造的に等価な一対一の対応の翻訳 (structurally equivalent translation pairing)」作業といえるものであるが、これが回答者の評定によって支持されなかったのである。

これは、調査のレスポンス・スケールを作成する場合、そこで用いられる語句の「言語上の類似性 (linguistic similarity) および/あるいは表現上の対称性 (expression symmetry)」を達成しさえすれば、そのレスポンス・スケールを使った「測定 (measurement)」はうまくいくと考える危

険性についての一つの示唆的な証拠といえよう。

これは、さらに、Disagree a little というのは普通の英語であるが、Lehne ein bißchen ab というのは人工的に構成されたドイツ語であるということの影響、つまり「レスポンス・スケールのための独特の言いまわしの影響 (scalepeak effects)」という問題とも関連しているかもしれない。

3.3 評定の平均値のサンプル・エラー

図1では、この実験的な調査のサンプル(対象者)の回答から計算された平均値(黒丸で示されている)が、確率論的に(stochastically)ありうる variation(サンプリングと測定のエラーに由来する variation——95%の信頼区間)の帯の幅(the band width)を示す縦の線上にプロットされている。いいかえれば、実験が繰り返されるならば、それぞれの評定の平均値の95%が、その帯の幅の範囲内に入るものと期待されるのである。

ここでは、Agree a little / Stimme ein bißchen zu から、In the middle / in der Mitte をへて、Somewhat disagree / Lehne teilweise ab にいたるさまざまな語句の帯の幅——評定の平均値の variation の幅——が示されている。左側はドイツの回答者の結果、右側はアメリカ合衆国の回答者の結果である。横に並んだ帯が、その幅については部分的に重なり合う形となっているのは、それぞれの表現(語句)の評定の平均値が統計的には有意差のないものであることを示している。

この図1から明らかなように、図のなかで一番上に出てくる表現は Agree a little / Stimme ein bißchen zu であり、一番下に出てくる表現は Somewhat disagree / Lehne teilweise ab である。

英語でも、ドイツ語でも、辞書的(lexically)に「中間(a mid-point)」「未決定(a non-decision)」「選択不能(an inability to choose)」を表わすそれぞれ四つずつの表現は、0点から20点までの21点スケールの中間点である10点のまわりに散らばっていることがわかる。

それぞれの評定の平均値の信頼区間は、一方でアメリカ合衆国とドイツで重なり合いが見られるが、他方でそれぞれの国のなかでもかなりの重なり合いが見られる。つまり、これら四つずつの表

現は、統計的には区別できないものといわなければならないのである。

3.4 アメリカ合衆国とドイツの相違点

表3からは、アメリカの回答者の評定平均値のレンジは、ドイツの回答者のそれよりもずっと狭いものであるという知見が読みとれる。

最も高い平均値が示されたのはドイツ語の Stimme voll und ganz zu (=Agree completely) の19.87であり、それに対応する英語の Completely agree は19.40となっている。そして最も低い平均値が示されたのはドイツ語の Lehne vollig ab (=Disagree completely) の0.67であり、それに対応する英語の Completely disagree は0.80となっている。

しかしながら、いくつかの語句について、平均値に替えて中央値(median values)で検討してみるならば、表4に示されているように、以上の結果はスケールの上の部分についてのみ当てはまるものであることがわかるのである。

以上から、アグリーメント・スケールをめぐるアメリカ合衆国とドイツの相違点が明らかとなったのであり、この点についてはさらなる研究の必要性が示唆されているといわなければならない。

4. おわりに

4.1 まとめ

MINTS プロジェクトの実験的な調査から、アメリカ合衆国とドイツで、レスポンス・スケールで用いられる表現(語句)に対する評定には全体としてかなり高い一致(correspondence)が見られることがわかった。ほとんどの表現については、両国間でその評定の平均値は近似しており、統計的にも違いは見られず(P. Ph. Mohker, J.A. Harkness, T.W. Smith and J.A. Davis, *Calibrating Response Scales Across Two Languages and Cultures*, Mannheim: ZUMA (mimeo)), 0.9以上の高い相関関係が示されているのである(T.W. Smith, op.cit. 1997)。

しかし、それにもかかわらず、両国の評定の平均値にはいくつかの重要な相違点が見られることも忘れてはならない。その一つは、Agree / Stimme

表3 アグリーメント・スケールの用語に対する回答者の評定の平均値

Item IDs D/US	German Expressions	Mean D	Mean USA	American Expressions
A20/v	Stimme voll und ganz zu	19.87	18.80	Strongly agree
A27/f	Stimme völlig zu	19.55	19.40	Completely agree
A17/h	Stimme bestimmt zu	19.22	19.00	Definitely agree
A16/b	Stimme zu	19.05	16.00	Agree
A12/aa	Stimme sehr zu	17.77	18.50	Very much agree
A28/d	Stimme ziemlich zu	16.33	17.20	Agree a lot
A 1 /a	Stimme im Grunde zu	14.93	13.80	Basically agree
A25/y	Stimme eher zu	13.99	13.50	Tend to agree
A 6 /r	Stimme wahrscheinlich zu	13.93	13.60	Probably agree
A18/t	Stimme teilweise zu	13.37	12.90	Somewhat agree
A11/n	Stimme mäßig zu	12.49	13.30	Moderately agree
A13/c	Stimme ein bißchen zu	12.46	12.10	Agree a little
A26/m	In der Mitte	10.02	10.10	In the middle
A22/z	Unentschieden	10.00	9.60	Undecided
A 4 /p	Stimme weder zu noch lehne ab	9.77	9.90	Neither agree nor disagree
A 9 /e	Kann ich nicht sagen	9.42	9.80	Can't choose
A 7 /u	Lehne teilweise ab	6.77	6.60	Somewhat disagree
A10/s	Lehne wahrscheinlich ab	6.66	6.20	Probably disagree
A21/o	Lehne mäßig ab	6.63	6.40	Moderately disagree
A24/k	Lehne ein bißchen ab	6.57	7.10	Disagree a little
A19/y	Lehne eher ab	5.82	6.40	Tend to disagree
A15/l	Lehne ziemlich ab	3.91	3.00	Disagree a lot
A14/q	Stimme nicht zu	3.32	3.50	Not agree
A 2 /i	Lehne bestimmt ab	2.42	1.00	Definitely disagree
A 3 /j	Lehne ab	2.41	3.50	Disagree
A23/bb	Lehne sehr ab	1.77	1.40	Very much disagree
A 5 /w	Lehne stark ab	1.21	1.50	Strongly disagree
A 8 /g	Lehne völlig ab	0.67	0.80	Completely disagree

zu や Disagree / Lehne ab あるいは Stimme nicht zu のようないわばアグリーメント・スケールにおける修飾語のつかない基本形ともいうべき用語に対しては、アメリカの回答者に比べて、ドイツの回答者のほうでより極端な評定がなされるということである。この点については、少なくともつぎの二つの側面からの検討が必要になってくるであろう。

①言語の側面：ドイツ語の表現（たとえば Stimme voll und ganz zu）は、英語の表現（たとえば Strongly agree）に比べて、より強い表現であるのかどうか。

②評定の側面：ドイツの回答者はアメリカ合衆国の回答者に比べて、レスポンス・スケールの表現に対してより極端な評定をする傾向があるのかどうか。

たしかに、①の側面も、②の側面も、異なる言語と異なる文化のコンテキストにおいては、明らかに異なるものとなると考えるであろう（T. P. Johnson et al., op. cit., 1997）。

4. 2 今後の課題

ここでは、以下の二つの課題をあげておきた

い。

（1）国際比較調査におけるレスポンス・スケールの翻訳の評価（assessment）は、一般に、①翻訳のよしあし、②測定のよしあし、の二つの側でなされる。しかし、今回の実験的な調査をとおして、さらに別の問題があることが明らかとなってきた。それは、それぞれの言語でのいわゆる「レスポンス・スケールに特有の言いまわしの影響（scalespe effects）」という問題であり、この問題についてはこれまでまったく研究がなされていない。一つの仮説的な提案として、もし対称性にこだわる特有の言い回しを採用する質問文作成のデザインがレスポンス・スケールに対する回答の分布を歪めるものであるとするならば、そのようなスケールの対称性にこだわらないデザインのほうがのぞましいのかもしれない。この点は、真鍋がつとに format effect という用語を用いて提起した問題の一部をなすものであり——この点については、稿を改めて詳細に論じたい——、きわめて重要な研究課題といわなければならない。この点については、言語コーパス（linguistic corpora）を活用することによって、サーベイ・リサーチの研究者は幅広くさまざまな表現を用いる

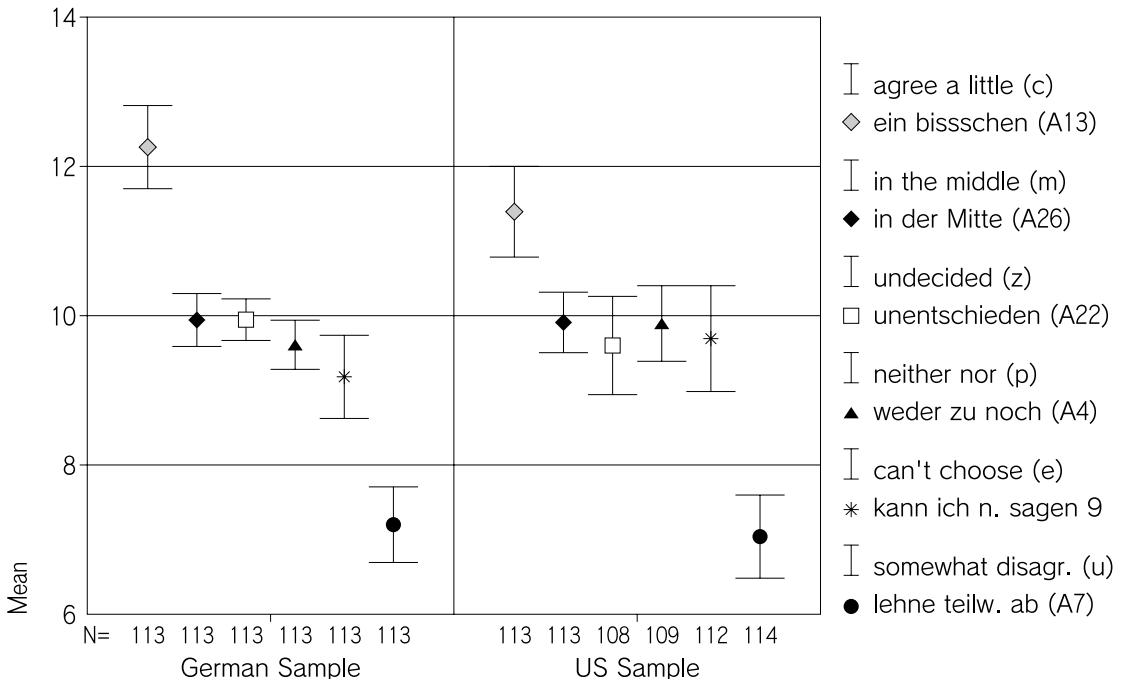


図1 評定の平均値のサンプル・エラー

表4 アグリーメント・スケールの用語に対する回答者の評定の中央値

German expressions	Median, Germany	Median, America	American expressions
Stimme voll und ganz zu	20.0	19.0	Strongly agree
Stimme zu	18.0	16.5	Agree
Weder zustimmen/noch ablehnen	10.0	10.0	Neither agree nor disagree
Lehne ab	03.0	03.5	Disagree
Lehne stark ab	01.0	01.0	Strongly disagree

ことが可能になるとともに、レスポンス・スケールの特有の言い回しについての再検討も可能になる。なぜ、a little bit unimportant というような表現が普通の表現とはいえないのかということにも、それなりの説明がつくことになるかもしれない。

(2) この実験的な調査では、具体的な内容を含んだ質問—回答というコンテキストからはまったく離れて、さまざまなサーベイ・リサーチで最も頻繁に用いられているレスポンス・スケール、たとえば「そう思う／そう思わない」「重要である／重要でない」「賛成／反対」などのスケールの個別の選択肢の語句を、回答者がどう評定するかを測定した。そこで、つぎの課題は、このような評定が実際の質問紙調査の結果にどのような影響を与えるかの探求ということになる。この点については、これまでのところ、まったく何もわかっていない。たとえば、ここでの実験的な調査の知見にもとづいて考えれば、International Social Survey Programme (ISSP) の英語版の「アグリーメント・スケール」で用いられるそれぞれのアグリーメント（あるいはディスアグリーメント）の諸段階（レベル）を表現するさまざまな語句は、回答者の実感からすれば等間隔 (equidistant) になっていない。ところが、これらは標準的なレスポンス・スケール (standard response scale) として、ドイツ語にも翻訳されて用いられている。そこで、ドイツ語版のアグリーメント・スケールについても英語版の場合と同じことがいえる。こうして、つぎの課題は回答者の反応からして等間隔になるようなレスポンス・スケールを作成し、それを用いたサーベイ・リサーチを実施し、その回答の分布を検討するというものである。

〈付記〉

今回の共同研究は、関西学院大学（特別研究費）と、ドイツ・マンハイム ZUMA と、(株)日本リサーチ・センターからの研究助成にもとづいてなされたものである。(株)日本リサーチ・センター取締役調査研究本部長の飯嶋建治氏には、いつも暖かいご支援をいただいている。また今回の共同研究も、ドイツ・ボン大学への客員教授としての招聘ということがあって、はじめて可能になったものといわなければならない。その意味でボン大学教授・近現代日本研究センター所長の Josef Kreiner 先生には筆舌に尽くしがたいご厚情をいただいた。さらに、ボン大学への招聘が東京財団の「教員海外派遣プログラム」によって財政的に支援されたものであることも記しておかなければならない。とくに Ellen Mashiko さん、小田早苗さん、内田晴子さんには大変お世話になった。これらすべての方々、関係機関に対し、改めて心から感謝の意を表したい。

付録 アメリカ合衆国用調査票

1. あなたの今の生活は、全体として幸せだと思いますか。それとも幸せではないと思いますか。

- 1 とても幸せである (Very happy)
- 2 まあ幸せである (Fairly happy)
- 3 あまり幸せでない (Not very happy)
- 4 まったく幸せでない (Not at all happy)

2. つぎのようなことについて、あなたの意見はどのようなものですか。

収入の多い人と少ない人之間にある所得の格差を縮めるのは、政府の責任である。

- 1 強くそう思う (Agree strongly)
- 2 そう思う (Agree)
- 3 どちらともいえない (Neither agree nor disagree)
- 4 そう思わない (Disagree)
- 5 強くそう思わない (Disagree strongly)
- 6 どれかを選ぶことができない (Can't choose)

3. 質問紙調査の質問文をよりよく、そしてよりわかりやすくするための調査にご協力ください。あなたがいろいろな用語をどのように使っているかをお知らせください。ここに0点から20点までのスケール（ものさし）があるとします。0点はある考え方に「完全にそう思わない」ということを意味し、20点は「完全にそう思う」ということを意味するとしておきます。これからいくつかの語句を読みあげますので、それぞれがどのくらいの数値になると思うかをお知らせください。

A. それぞれの語句は、0点から20点までの間で、どのくらいの数値になると思いますか。

カードQ. 3

最初の数値 変更後の数値

- a. 基本的にそう思う (Basically agree)
- (カードをシャッフルして、残りの語句についてたずねる。)
- b. そう思う (Agree)
- c. 少しそう思う (Agree a little)
- d. 大いにそう思う (Agree a lot)
- e. どれかを選ぶことができない (Can't choose)
- f. 完全にそう思う (Completely agree)
- g. 完全にそう思わない (Completely disagree)
- h. 断然そう思う (Definitely agree)
- i. 断然そう思わない (Definitely disagree)
- j. そう思わない (Disagree)
- k. 少しそう思わない (Disagree a little)
- l. 大いにそう思わない (Disagree a lot)
- m. そう思う、そう思わないの中間 (In the middle)
- n. ほどほどにそう思う (Moderately agree)
- o. ほどほどにそう思わない (Moderately disagree)
- p. どちらともいえない (Neither agree nor disagree)
- q. そう思わない (Not agree)

- r. ほとんどそう思う (Probably agree)
- s. ほとんどそう思わない (Probably disagree)
- t. ややそう思う (Somewhat agree)
- u. ややそう思わない (Somewhat disagree)
- v. 強くそう思う (Strongly agree)
- w. 強くそう思わない (Strongly disagree)
- x. そう思う方向にある (Tend to agree)
- y. そう思わない方向にある (Tend to disagree)
- z. 決めていない (Undecided)
- aa. とてもそう思う (Very much agree)
- bb. とてもそう思わない (Very much disagree)

B. (回答が記された用紙を回答者に見せて、つぎのようにたずねる。)

あなたのお答えをごらんください。その上で、もし数値を変えたほうがいいと思われましたら、右側の「変更後の数値」の欄にそれを書き入れてください。

4. つぎに、もうひとつ別の、同じように0点から20点までのスケール (ものさし) についてお答えください。ここでは0点は重要性の「最低のレベル」、20点はその「最高のレベル」を示しています。これからいくつかの語句を読みあげますので、それぞれがどのくらいの数値になると思うかをお知らせください。

カード Q. 4

(カードをシャッフルして、その順にたずねる。)

数値

- a. かなり重要である (Pretty important)
- b. 断然重要である (Definitely important)
- c.それほど重要でない (Not too important)
- d. 非常に重要である (Extremely important)
- e. あまり重要でない (Not very important)
- f. まあ重要である (Fairly important)
- g. 高度に重要である (Highly important)
- h. ほとんど重要である (Probably important)
- i. まったく重要でない (Not at all important)
- j. 並外れて重要である (Exceptionally important)
- k. 重要でない (Not important)
- l. とても重要である (Very important)
- m. やや重要である (Somewhat important)
- n. 重要である (Important)
- o. どちらともいえない (Neither important nor unimportant)
- p. まったく重要である (Quite important)
- q. とてもとても重要である (Very, very important)
- r. 少し重要である (A little bit important)
- s. わずかに重要である (Slightly important)
- t. 完全に重要である (Completely important)

5. さらに、もうひとつのスケール (ものさし) についてもお答えください。

ここでは0点はある考え方に「完全に反対」ということを意味し、20点は「完全に賛成」ということを意味しています。これからいくつかの語句を読みあげますので、それぞれがどのくらいの数値であるかをお知らせください。

カード Q. 5

数値

- a. わずかに反対である (Slightly against)
- b. 強く賛成である (Strongly in favor of)
- c. 反対である (Against)
- d. 強く反対である (Strongly against)
- e. どちらともいえない (Neither against nor in favor of)
- f. わずかに賛成である (Slightly in favor of)
- g. 賛成である (In favor of)

(Q. 3にもどって、6 a~hの語句に対してなされた評定をチェックした上で、真中のコラムにQ. 3でなされた評定を記入する。)

6. すでに評定によって、数値を与えていただいていたいくつかの語句について、もう一度考えていただきたいと思っています。ここでもスケール(ものさし)は0点から20点で、0点はある考え方に「完全にそう思わない」ということを意味し、20点は「完全にそう思う」ということを意味するとします。あなたは「基本的にはそう思う」に 点 (Q. 3で回答された数値) を与えました。そこで、ここではつぎのことを考えていただきたいのです。それは、「基本的にはそう思う」という語句が、あえていえば、最低点では何点となり、最高点では何点となるかということです。つまり、あなたが0点から20点までのスケール(ものさし)の上で、「基本的にはそう思う」という語句については、どのくらい点数の幅を考えているのかということが知りたいのです。では、「基本的にはそう思う」の最低点は何点だと思いませんか。つぎにその最高点は何点だと思いませんか。

(Q. 6 b~hについても同じ質問を繰り返す。)

カード Q. 6

最低点	面接者：	最高点
	(Q3の結果を書き入れてください。)	

- a. 基本的にそう思う (Basically agree)
- b. 強くそう思う (Strongly agree)
- c. どちらともいえない (Neither agree nor disagree)
- d. そう思わない (Disagree)
- e. どれかを選ぶことができない (Can't choose)
- f. そう思わない (Not agree)
- g. 強くそう思わない (Strongly disagree)
- h. そう思う (Agree)

(注：Q. 3でこれらの語句が0点から20点までのスケール(ものさし)で評定されていない場合は、Q. 6の質問はしないで、Q. 7へ進む。)

7. さて、では、これまで取りあげてきた語句、たとえば「そう思う」「そう思わない」「どちらともいえない」「重要である」「重要でない」といった語句が、それぞれどのような意味をもっているか、そこにどのようなことが含まれているか、についておたずねします。

A. 「そう思う」というのはどういうことだと思いませんか。どのような意味をもっていると思いませんか。そこにはどのようなことが含まれていると思いませんか。

(以下同じようにたずねる。)

B. 「そう思わない」

C. 「どちらともいえない」

D. 「重要である」

E. 「重要でない」

8. 最後にいくつかの対句を「そう思う／そう思わない」という対句とくらべてみてください。まず「賛成／反対」という対句は「そう思う／そう思わない」という対句と「ほとんど同じ意味 (Very much the same)」「やや同じ意味 (Somewhat the same)」「やや違う意味 (Somewhat different)」「とても違う意味 (Very much different)」のいずれだと思えますか。

(Q. 8 b～e についても同じようにたずねる。)

カード Q. 8

ほとんど 同じ意味	やや同じ 意味	やや違う 意味	とても 違う意味	わからない
--------------	------------	------------	-------------	-------

- a. 賛成である／反対である
(for / against)
- b. 重要である／重要でない
(important / unimportant)
- c. 好き／嫌い
(like / dislike)
- d. 賛成する／反対する
(favor / oppose)
- e. 肯定的／否定的
(positive / negative)

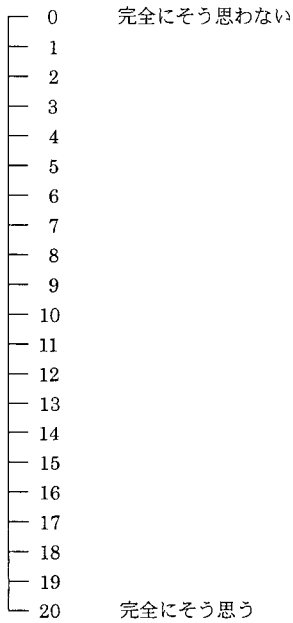
9. あなたが子供だったころ、あなたはご家庭で主に何語を話していましたか。

10. 現在では、ご家庭では何語を話していますか。

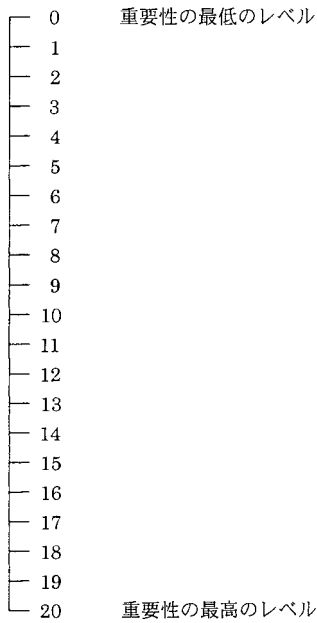
第一に： _____

第2に： _____

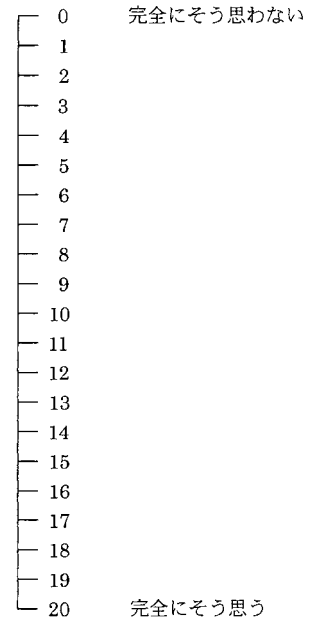
カード Q.3



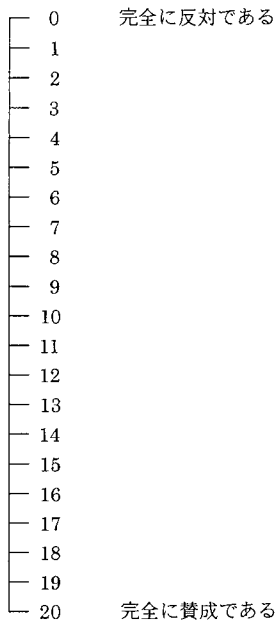
カード Q.4



カード Q.6



カード Q.5



カード Q.8

1. ほとんど同じ意味(Very much the same)
2. やや同じ意味(Somewhat the same)
3. やや違う意味(Somewhat different)
4. とても違う意味(Very much different)

A Study of Equivalence of Expressions from Response Scales Used in Cross-National Survey Research (2)

ABSTRACT

The purpose of this paper is to review the MINTS project (Research into Methodology of Intercultural Surveys) which was carried out as a comparative and collaborative research of ZUMA (Zentrum für Umfragen, Methoden und Analysen, Mannheim, Germany) and NORC (the National Opinion Research Center, University of Chicago, USA). This paper deals with the findings of experimental pilot studies conducted in the USA and Germany in 1995. This paper is based upon a literature survey in Peter Ph. Mohler, Tom W. Smith and Janet A. Harkness, Respondents' Ratings of Expressions from Response Scales: A two-country, two-language investigation on equivalence and translation, in: *NACHRICHTEN*, Spezial, No. 3, ZUMA, 1998.

The major tasks in the experimental pilot studies had respondents rate expressions of agreement on a 0 to 20-point scale. The rating experiments showed in general a high correspondence between the a priori pairings of expressions by researchers in the USA and Germany. Most means of rating are close and not statistically different from one another. Despite this high correspondence, there are some important differences in the mean values of rating. For example, the simple base terms such as agree-disagree are rated more extremely by German respondents than the English counterparts are by American respondents. The findings are based upon respondents' reactions to expressions removed from the response scale context. It remains to be seen to what extent these carry over to a response scale context.

Key Word: cross-national survey research, response scale, equivalence